

# 非対格動詞・非能格動詞の受動文の過剰産出と

## 母語干渉に関する予備調査の報告

高等教育開発センター教授

こばやし まさひろ  
小林 昌博

### 1. はじめに

英語学習者の英文産出に関して、受動態の過剰産出がよく観察されることが知られている（Yip 1995、Ju 2000 など）。本稿では、母語干渉の影響を調べるために、日本語の間接疑問文を英語に訳した文（英語としては非文）の容認度と非対格動詞と非能格動詞における受動文の容認度の相関性を調査することとし、予備的な容認度・文法性判断テストを実施したのでその結果を報告する。調査の結果、間接疑問文と各種構文パターンの受動文の間に弱い相関が観察された。母語の影響を受けやすい構文等における誤用分析が進めば、それに基づく教材開発が可能となり、教育実践にも活かすことができると考えられるため、今後はさらにデータの数を増やして詳細に母語干渉の影響を調査する予定である。

### 2. 自動詞構文における過剰受動化と先行研究

英語学習者が英文を産出する際に、(1)のように自動詞構文を受動態にしてしまう誤用が観察される。

(1) \* The accident was happened by the taxi driver last night.

学習者による受動態の過剰産出に関する先行研究として、Perlmutter (1978)の非対格仮説に基づいた統語的分析が多くある（Zobl 1989、Oshita 2000 など）。非対格仮説によると、英語の自動詞は主に非対格動詞と非能格動詞に分類され、前者は主語が深層構造において目的語位置に生起し、表層構造において名詞句移動操作により主語位置に移動するとされる。この仮説に基づき、この名詞句の移動と受動文生成における名詞句移動の類似性が誤用の原因となっているという主張がなされる。ただし、非対格仮説において非能格動詞は深層構造と表層構造ともに主語位置に生起するとされるため、非能格動詞における受動態の過剰産出についてはまた別の説明が必要となってしまう。さらに生成文法の名詞句移動を想定しない理論的枠組みでは成立しない説明となる。

本研究では、学習者の母語知識が誤用の産出に影響している可能性を探るために、予備調査として実施した容認度判断テストの結果について報告する。具体的には、日本語では英語には直接相当する表現がない(2)のような「間接受動態」構文が存在することが知られているが、この「～られる」形が日本語の受身形と類似しているために、英語の自動詞における受動態の過剰産出が促される可能性が指摘されており（Yamakawa 1994、稲葉&稲葉

2019 など)、本研究ではこの関係性に注目し調査することとした。

(2) 一郎は帰り道に雨に降られた。

Yamakawa (1994)は、日本語から英語への翻訳タスクを用いて、日本語の間接受動文から英語受動文の過剰産出を調査している研究であるが、産出された英文の誤用の割合を調査しているため、本研究では英語としては非文となる日本語間接受動文の直訳文の容認度と自動詞の過剰受動文の容認度の相関性を調べることで、母語干渉の可能性を調査することとした。

### 3. 容認度・文法性判断テストのデザイン

今回は容認度・文法性判断テストとして、表 1 にあるように非能格動詞の能動文と受動文をそれぞれ 3 文、他動詞用法のある非対格動詞の能動文と受動文（自他交替ありの非対格動詞、stop や increase など）をそれぞれ 3 文、他動詞用法の容認度が下がる非対格動詞の能動文と受動文（自他交替なしの非対格動詞、begin や happen など）をそれぞれ 3 文、間接受動文を 4 文、それらに錯乱文を 8 文加え合計で 30 文のテスト文を作成した。なお、自他交替の区別も含めテストで使用した非対格動詞は Perlmutter (1978)や山川他 (2005)と稲葉 (2020)にそって選んで採用した。実際にテストを実施する際には、これらの文をランダムな順番に並びかえて被験者に提示した。文法的で容認度が高いとされるパターンは非対格動詞において III と V、非能格動詞では能動文の I であり、非対格動詞の受動文（パターン IV と VI）は容認度がかなり下がると言われている。また非能格動詞の受動文 II と間接受動態の英訳 VII は非文法的な例文となる。テスト文作成にあたり、それぞれの構文のテスト文を多めに作成し、3 人の英語のネイティブスピーカーに事前にテスト文の容認度の評価を依頼し（非文法的/不自然とする評価の「-2」から文法的/自然とする評価の「+2」までの 5 件法）、3 人の容認度の正負が同じ（3 人とも評価の値の正負が同じ）もののみを選びテスト文を作成した。今回の容認度・文法性判断テストは予備調査として本学の 1 年生 32 名に対して実施した。実施方法としては上記同様に佐藤 (2009)などでも採用している「-2」から「+2」までの 5 件法で英文としての容認度・文法性を評価してもらい、英語として非文である間接受動文の容認度・文法性評価と非対格・非能格動詞の受動文の容認度・文

表 1：容認度・文法性判断テストのテスト文

| 動詞の種類 | 他動詞用法  | 構文のタイプ | パターン |
|-------|--------|--------|------|
| 非能格動詞 |        | 能動文    | I    |
|       |        | 受動文    | II   |
| 非対格動詞 | 自他交替あり | 能動文    | III  |
|       |        | 受動文    | IV   |
|       | 自他交替なし | 能動文    | V    |
|       |        | 受動文    | VI   |
| 間接受動態 |        | 受動文    | VII  |

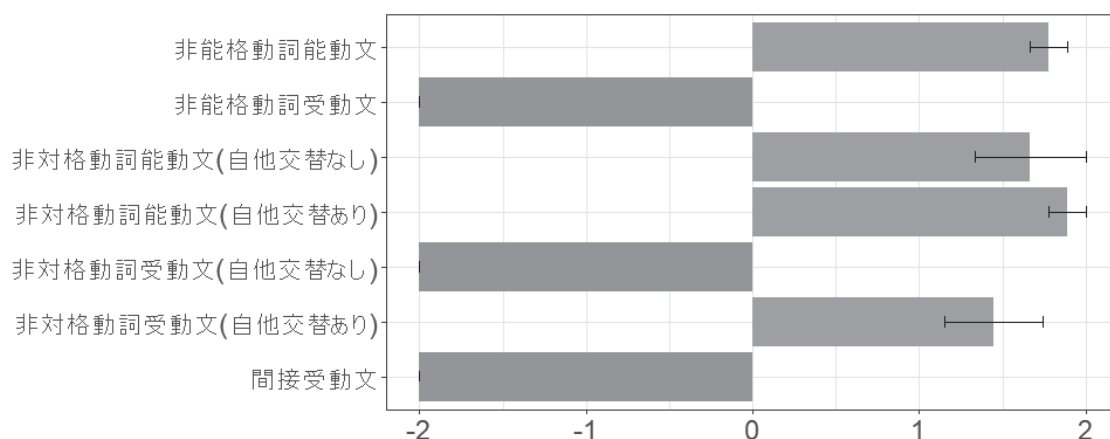


図 1：各構文パターンの容認度・文法性の評価値の平均（ネイティブスピーカー）

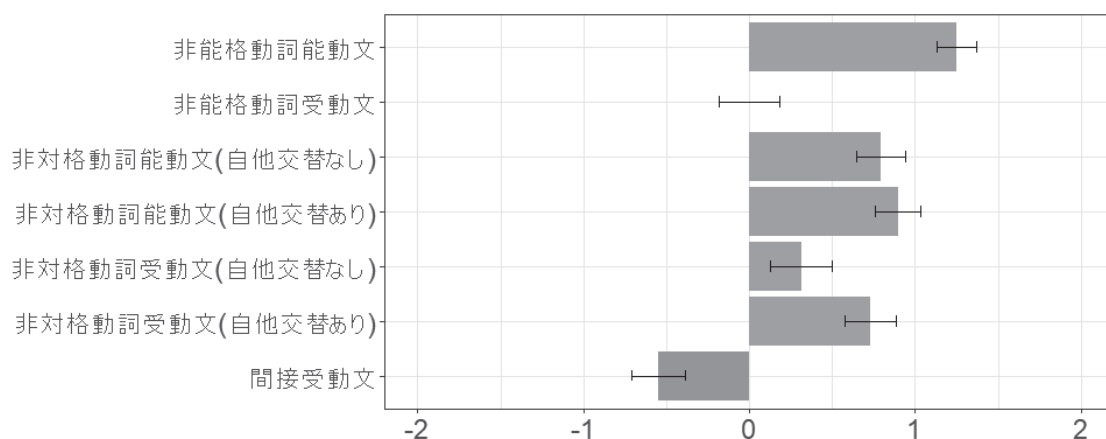


図 2：各構文パターンの容認度・文法性の評価値の平均（被験者）

法性評価の相関性を調査した。また、3人のネイティブスピーカーに対しても同様のテストを実施してネイティブスピーカーの判断として用いた。本調査の内容は本学の非医学系研究倫理審査委員会に申請し、承認されたものである。

#### 4. 容認度・文法性テスト結果の分析

本節では、実施した容認度・文法性テストの結果の分析を報告する。図1は表1にまとめた各構文のパターンのネイティブスピーカーの評価平均値である。図1を見ると、非文と判断されると予想された非能格動詞受動文（パターンII）と間接受動文（パターンVII）は予想通り「-2」の平均値を示している。また、非対格動詞の受動文に関しては、自他交替なしとされる例文はやはりスコアが低い一方で、自他交替があるとされる例文（パターンVI）は正の値の平均値を示している。ただし、他の正の平均を示すパターンと比較すると

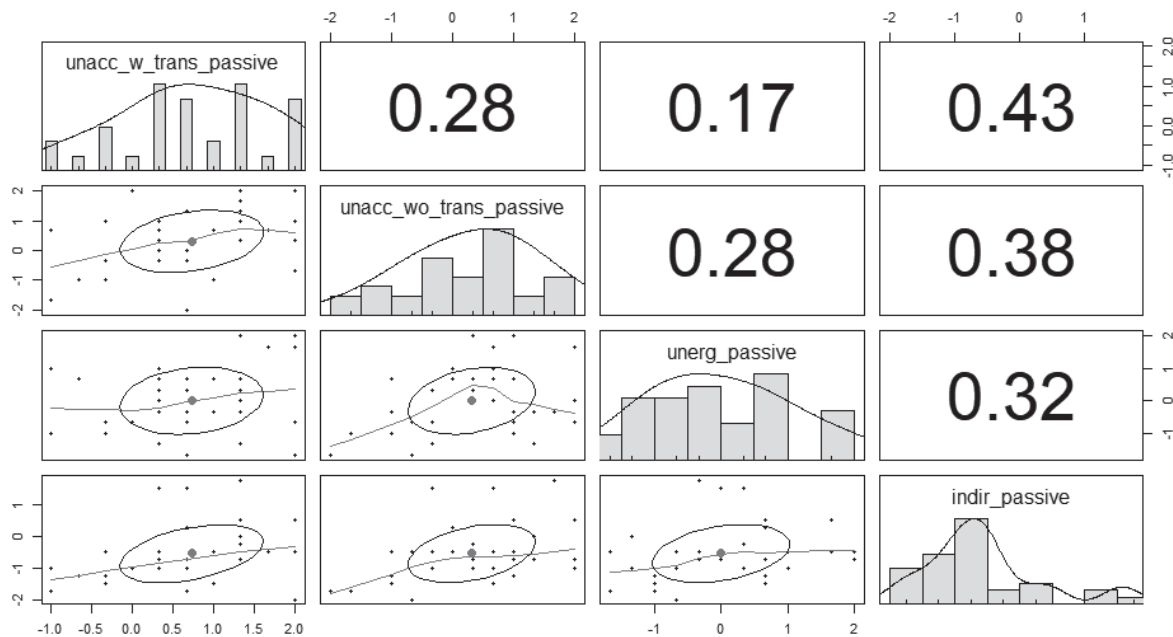


図 3：間接受動文と各パターンにおける受動文との相関係数と散布図

低い容認度を示しているため、概ね先行研究の主張と同じ傾向を示していると言える。図 2 は、同パターンの学生被験者の平均値となる。非文となる間接受動文の英訳文に関しては負の値を示しており、被験者は概して容認度の低さを理解しているようである。非能格動詞の受動文も低い容認度を示している。

次に、日本語の母語転移の可能性を探るために、英語には存在しない日本語の間接受動文の容認度・文法性評価と各パターンの受動文の容認度・文法性評価の相関を調べた。本調査は 5 件法の形式なので、スペアマンの相関係数を用いた。図 3 はこれら構文パターンの相関係数とヒストグラム、および散布図である。なお、それぞれの被験者の構文ごとの評価値は、当該パターンの例文の平均値を用いている。間接疑問文と非対格動詞受動文（自他交替あり）の相関係数は 0.43 ( $p = 0.01$ )、間接疑問文と非対格動詞受動文（自他交替なし）は 0.38 ( $p = 0.03$ )、間接疑問文と非能格動詞受動文は 0.32 ( $p = 0.07$ ) であり、各項目間に弱い相関があることを示唆している。ただし、各構文における項目内の信頼性係数（マクドナルドの  $\omega$  係数）を調べてみると、設問数が少ないこともあり、間接疑問文では 0.57、非対格動詞受動文（自他交替あり）では 0.43、非対格動詞受動文（自他交替なし）では 0.48、非能格動詞受動文では 0.55 と係数値が低いため、正確な結論を出すために設問の内容を精査し設問数を増やして本調査に臨む必要がある。

## 5. まとめ

本稿では、非対格動詞や非能格動詞の受動態の過剰産出現象を母語干渉の観点から調査

する試みを提示した。具体的には、英語では非文とされる間接疑問文の英訳文と非対格動詞および非能格動詞の受動文との相関性を調査し、構文間で弱い相関性が観察されたため、母語干渉の可能性をさらに調査する予定である。今回の調査は、容認度・文法性判断テストを 32 名の被験者に対して実施した予備的な調査であったため、以下の改善点を踏まえて将来的にさらなるデータの収集を行う。まず、前節でも述べたように調査対象になった構文パターンの  $\omega$  係数の値が 0.7 より低いため、設問数を増やししながら、今回の予備調査の結果を見て問題文の精査をする必要がある。次に、Yip (1995) や Ju (2000) などによると、受動態の過剰産出は被験者の習熟度にも左右される可能性があるため、習熟度別のデータを収集しデータの数を増やして同じ傾向が観察されるかを調査する必要がある。また、弱い相関性が観察されたとしても、それが直接的な相関性なのか、それともそもそもの英語力と間接受動文の容認度に相関性がある、同様にそもそもの英語力と非対格・非能格動詞の受動文の容認度に相関があるような、いわゆる疑似相関が成立する可能性を否定できていないため、間接受動文と各受動文との相関性を直接調査できる実験デザインを考慮する必要もあると思われる。最後に、稲葉 (2020) にあるような中間言語の研究も視野に入れるために、ニューラルネットワークモデルを用いた言語習得モデルを構築し、受動態の修得過程のシミュレーションを行うことで受動文の修得のメカニズムも研究する予定である。

## 謝辞

本調査にご協力いただいた被験者、ネイティブスピーカーの皆様に感謝申し上げます。本研究は JSPS 科研費 22K00762 の助成を受けたものです。

## 参考文献

- 稲葉えいり、稲葉みどり. 2019. 「英語の受動態の習得に関する一考察」. 教科開発学論集. 7. Pp.153-159.
- 稲葉えいり. 2020. 「自他交替動詞を含む英語構文の中間言語の分析」. 日本認知科学会第 37 回大会発表論文集. pp.553-558.
- Ju, M. K. 2000. Overpassivization Errors by Second Language Learners. *Studies in Second Language Acquisition*. 22. pp.85-111.
- Oshita, H. 2000. What is happened may not be what appears to be happening: A corpus study of 'passive' unaccusatives in L2 English. *Second Language Research*, 16 (4). pp.293-324.
- Perlmutter, D. M. 1978. Impersonal passives and the unaccusative hypothesis. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkley Linguistics Society* 4. pp.157-189.
- 佐藤恭子. 2009. 「自他交替を許す非対格動詞の習得における母語と UG の影響」. 外国語教育メディア学会(LET)関西支部『研究集録』. 12. pp.37-51.
- Yamakawa, K. 1994. Error analysis of a passive sentences written by Japanese learners of English: With reference to native language transfer. *Annual Review of English Language Education in Japan*. 5. pp.101-110.
- 山川健一、杉野直樹、木村真治、中野美知子、大場浩正、清水裕子. 2005. 「日本人英語学習

者による非対格動詞と非能格動詞の習得」. 大学英語教育学会中国・四国支部研究  
紀要. 2. pp.91-110.

Yip, V. 1995. *Interlanguage and Learnability: From Chinese to English*. Benjamins.

Zobl, H. 1989. Canonical typological structures and ergativity in English L2 acquisition. In Gass,  
S. M. & Shachter, J. *Linguistic perspectives on second language acquisition*. pp.203-221.  
Cambridge University Press.

添付資料 (容認度・文法性判断テストのテスト文)

パターン I

He regularly swims in the pool.

My baby slept well last night.

My daughter dances every day at school.

パターン II (非文パターン)

My sister was worked by her boss on the weekend.

The patient was smiled by children at the hospital.

The students were run by their coaches at school.

パターン III

My wife grew up in Osaka.

My friend stopped running because of the rain.

The car turned to the right.

パターン IV (容認度が低いパターン)

His salary was increased by his company last year.

This restaurant was opened by the owner last year.

The class was started by the teacher at 10:30.

パターン V

The concert began at 7:30 last night.

The train arrived at the station on time.

The poster fell for some reason.

パターン VI (容認度が低いパターン)

The ghosts are existed in dreams.

The accident was happened by the taxi driver last night.

The girl was disappeared without saying anything.

パターン VII (非文パターン)

The teacher was cried by his student yesterday.

His father was died by his son three months ago.

My sister was rained on the way back home.

My father was broken his watch yesterday.